

時事新報

松方大臣の歸京を待て
見に若かずとは都て物事を合
の説を聞くよりも一度び其實

雜記

始めとして各地方の寺々は専ら之を擔任して至當である。可し僧侶の本務は唯財物を貢ふのみに非ずる場合に於ては物を與ふるの工風もあかる可らず本願寺などは如何せしや東京に供大なる別院もありながら今日に至るまで何等の沙汰もなく不審なれ商賣一方の三義社の如き懸善などの事は商社の知る所に非ずと云へば夫れまでのみにして強ひて咎む可きにあらざれど岩崎家獨立の名を以て義捐の募集に應じたり一商社の公務と一家の私事と其區別分明ありと云ふ可し然るに本願寺の如きは公けにも私にも單に慈悲の一片を以て體を成した。者が黙して動かすとは嘲か其本領に不似合なるが如く況んや右に云ふ古着古道具の施與は寺より直に物を出せど云ふに非ず唯その周旋奔走に勞するのみに於てこそ僧侶も少しく思案しては如何と敢て俗世界より一言

大垣地方の全焼を開き三日間の食料を用意して本日午前八時三分米原駅一番列車に乘し大垣に向ひ出發せり行々鐵道線路の模様を見るに別に異状なく長岡駅を原間に多少損所のありしも既に前夜來修復を加へ遂行にて此處を経過し程あく關ヶ原停車場に着車したれば車窓より關ヶ原驛の模様を見るに人家其他とも異状なく此處より垂井驛迄は更に線路に故障なきも垂井以東の線路は處々に猛烈を生じ甚だ危險あるより乗客は皆垂井驛にて下車せしめたり ●

午前十時人力車を驅り同驛を發し大垣に向ふ途中各村落の模様を見るに安八郡綾戸村に至り始めて道路に倒れたり且つ村内二三戸の倒屋あるを見認めたり漸く東進するに従ひ同郡長杉村に至れば村中三四分通りの倒屋路傍に轉倒し早已に取片付に着手し居り次の鹽田村に至ては益々倒屋の多さを見認め全村七八分通りは破潰せられ偶々建家あるも壁なく瓦落ち斜傾せざるものとてはなく住民は皆道路に小屋掛けをして避けて居るの姿状は一々枚舉するに暇なく又容易に筆紙の盡

師も次第に加はり舟
田中獨太郎、三等軍
の裁斷^{さげん}或は截開術^{さいかんじゆ}を
八日より三十一日に
合五百七八十名に達
國地^{こくち}、南寺内、船明^{ふなあき}、
一箇所に付救助^{つけきゆう}す
ひ日々の焚出米^{やきしり}は六
より人車にて運搬^{うんぱん}し
歿死人及^{そし}破損^{はそん}の家屋
ては未だ確報^{かくほう}なし尙
垣營^{がんえい}察署に於て取調^{しきゅう}
新町^{しんまち}二百五十五戸
水町^{みずまち}四十七戸、
袋町^{ふくろまち}十一戸、岐
百十^{ひゃくじゅう}戸、麻江^{まこう}戸、
顛川^{たんかわ}二^に百戸、高^{たか}戸、
町百戸^{ちよ}今村^{いまむら}五^ご戸、
死傷及^{そし}瀕危^{へんき}

○大壩の震災第一報
十月三十日夜米原にて
特派通信員本社大坂出張所 謹上 時親
本日午後四時二十五分大坂梅田停車場發汽車にて同車
時當米原停車場に着せり直に大壩に向て出發する中
意ありしも如何せん汽車は此列車限り上下とも發車せ
ざれば已むなく米原に一泊せり宿て大坂を發して以來
車窓より途中の模様を見聞するに京坂間は別に異状を
く滋賀縣下に於けるも草津停車場以西は格別の損害を
見受けざりしが汽車北行するに隨ひ鐵道線路中多少の
損所あり殊に安曇川鐵橋の西手凡五丁程の線路は一時
大破を生じ漸く修復の終りを告げし迄にて此間を徐々
して能登川より彦根に至る間は格別の變あるみと見ゆ
けきりし車中被害地取調の爲め派出せし郡吏の話に依
れば西江州は被害の少なかりしも東江州中東北の方是
も酷しく先其實際を申せば八幡にて全潰家屋一戸、半
潰三戸、微傷一人彦根は全潰二十戸、半潰五十四戸、
死三名、重傷二名、輕傷七人長濱にて永保町田町等に全
潰二十一戸、半潰廿三戸、即死三名、負傷十五名なり
此他長濱停車場のアラット破潰、濱地埋立の場所等に
陥落の地を生せし處もあり又彦根監獄署の周圍土塁は
悉く轉倒したるもの已決囚は外役に就きし後の事とて未
決囚は房中に在りしも幸ひ監房に損所なく其後（二十二
日比）時々大小の震動ある故彦根長濱の如きは夜中頻
に臥す者なく道路の中央に戸板並べて何れも露營し
あし居り更に安眠せざるが爲め晝間の職業は殆んど寝
業の有様なるが被害者の爲め救助場を設けたるも別に
救助を請ふ者多く有力家は義捐金募集に奔走し居れ
又廿八日の朝大激震の際同縣に有名ある高山伊吹山の
山腹より巨大なる岩石を震り落し爲に其響き遠く聞こ
て音塵かりしが琵琶湖上の模様は平常と更に異りし事
あかりしと云ふ夫より米原驛に下車し此地の模様を四

すべきにあらず途中の模様は先是位に止め書き是より
大災害地たる大垣の實況を左に記載すへし
抑も今回地震にて岐阜縣下に於ける災害の最も多く
且慘酷を極めたるは大垣町を中心として其八郡を第一
とせり之に次くものは岐阜市名古屋等のよしあるか今
大垣に於ける去る廿八日激震以後の模様を開くに同日
午前六時三十分頃轟々たる鳴動の起るや否忽ち地上を
持ち掲ぐること一二尺許もあらんかと思ふ間もなく市
街の家屋其儘押潰れたる物音は百雷の一時に落ちし如
く天地も崩るゝ許りなりしか號呼の聲耳底を貫き其物
凄き事警ふるに物あく大割穀は僅か五分間程にて止む
りしも倒屋の塵煙は中天に立ち上り爲に一時は暗黒なり
しか十五分間を経るかと思ふ中全市街の各所に火烟の
上りければスワ火事の起りしあらんと狼狽へ廻るも誰
一人として防火に盡力する者なく見るゝ火勢は猛烈
となり數箇所の火口漸く打合するに至り火勢天を焦
して焼立てければ震災の爲め或は家の下敷となり或は片
足を梁木に挟まれ又小兒を懷き下敷にあるあり親は子
を助けんとし子は親を救はんと泣き叫びしも逃れ出づ
るに途あく烈火の中に焼死せし者多く實に焦熱地獄を
目前に現出し其慘害あるば筆紙の克く表す可きにあら
き又脚を踏み手足を折り壓死せしもの夥しく左れけれ
大垣警察署には署長南宮正氏先づ警察署に馳付け巡査
を督して第一消防に着手せされば多くの人民を生あか
ら焼殺すの恐れありとて頻りに人夫を募り集めたりと
も誰一人應する力なく已を得ず遠く赤坂地方に急使を遣
て駆せ人夫の募集に着手し又一面には大垣監獄署の囚徒
と出し消防及壓死人掘出し方に從事したれば差しもの
猛火翌二十九日夕方に至り消止むるを得たり依て直に
舊城前郷町公文學校内に臨時假病院を開設し醫師を
従ひ二名の醫師にては中々手の廻らざるより更に垂死者を
掘出したるも何分屋根梁天井等を切り開かざれば容易に
救人ひ出す能はず且つ機械類の不足より體々苦心して
人々夫八十名を得て巡回囚徒等は力を合せて歿死者を

現在戸數	四千四百三十九	○岐阜の觀測 岐阜
全焼三千五百五十八人	明治二十四年十日	に於て地震す最初より三秒時を経て強至り烈震(五分間餘)を測るみと能は
震動を感じり而してならん皆布字稻原	ならん皆布字稻原	し様に震ゆ其一を一寸三分長十間餘れ
他家屋は多く北方屋も多かりし測候所	他家屋は多く北方屋も多かりし測候所	轉落せり
烈震後午後一時五十分同二時廿九回	烈震後午後一時五十分同二時廿九回	至る震動回數は六百六十八回
廿八日午後一時五十分同七時十三分同十一時	廿八日午後一時五十分同七時十三分同十一時	廿九日午前零時廿八時三十八分同六時四分同七時五十二分二十七分同午後一時十五分
三十日午前零時廿八時三十八分同六時十三分	三十日午前零時廿八時三十八分同六時十三分	三十日午前零時廿八時三十八分同六時十三分同午後一時十五分
○皇后陛下の御仁慈	○皇后陛下の御仁慈	○皇后陛下の御仁慈
於て負傷者救護着難召に由り出張せし	於て負傷者救護着難召に由り出張せし	於て負傷者救護着難召に由り出張せし
岩倉公爵の義捐	岩倉公爵の義捐	岩倉公爵の義捐
景を添へ難災地獄相	景を添へ難災地獄相	景を添へ難災地獄相
今般大地震に付罹	今般大地震に付罹	今般大地震に付罹
御取計の趣就ては	御取計の趣就ては	御取計の趣就ては
阜縣へ合二百圓被	阜縣へ合二百圓被	阜縣へ合二百圓被
及御依頼候也	及御依頼候也	及御依頼候也